茅葺き屋根のある暮らしのサイクルを再生する取組

……西岬海辺の里づくり協議会

設立年月……2009年10月
メンバー数……20人
代表者名……小金晴男（こがね・はるお）
連絡先　〒294-0302千葉県館山市塩見349　岡部　明子
電話　043-290-3086　　FAX　043-290-3152
メールアドレス　aokab@nifty.com
ホームページ　http://okabelab.wix.com/okabelab
facebookページ
https://www.facebook.com/Okabekuukan/
＜団体のミッション＞
私達は千葉県館山市塩見地区に唯一残る茅葺き民家ゴンジロウを拠点に、同古民家の茅屋根手入れなどの活動を通して多様な協働の場を作り、美しい里の景観を維持しながら、新しいコミュニティ運営の形を探っています。

団体設立経緯

「西岬海辺の里づくり協議会」は2009年、千葉大学が千葉県館山市塩見地区に残る茅葺き民家「ゴンジロウ」をお借りしたことをきっかけに地元住民有志、市職員、千葉大学教員、学生をメンバーとして設立されました。協議会は、“茅葺き古民家を拠点として「茅屋根の手入れ」といったケアプロセスを通して多様な協働の場をつくりだし、地域コミュニティに基づく美しい里の景観を維持しながら、新しいコミュニティ運営の形を探ること”を目標に活動しています。

これまでも活動拠点である茅葺き民家ゴンジロウのケアから始まって、地元住民と学生が話し合いや里歩きを重ねながら地域のことを学び、現状の課題解決や集落の将来について共に考え活動範囲を徐々に集落全体へと広げて来ました。現在も月に1回程度メンバーが集まり、話し合う協議会を継続して開催しており、積極的に活動を行なっています。

地域概要

塩見集落は千葉県館山市の中心部から車で15分ほどの距離に位置する西岬地区の中の集落の1つです。塩見は千年以上前から続く集落と言われており、豊かな里山と里海に囲まれた地形を活かして長い間半農半漁の生活をしながら暮らし継いできました。

現在では人口約200人、世帯数約100世帯の規模の集落となっています。他の農村地域と同様に少子高齢化が進み1990年と比べると人口は75%まで減少しており、高齢化率も47.9%と館山市の他の地区よりも高い割合ですが、交通の便がよいことから新規移住者や別荘所有者が増加し、人口の4割近くを占めているのもこの地区の特徴の1つです。人口が減少し、昔から続く里の風景が失われてしまったわけではなく、昔と比べて耕作放棄地や荒れ地が増加しつつありますが、住民の手の届く範囲では現在もきちんと手入れされた美しい里の風景が広がっています。

活動に至った背景や理由

西岬海辺の里づくり協議会では2009年から活動を開始しました。これまでは集落に唯一残る茅葺き民家「ゴンジロウ」をなんとか守るために、地元住民と学生が協力して茅を集落内外であちこち探し歩いて集め、茅が少なくても何とかなる段葺きという葺き方を用いてきました。自分たちで収穫出来た茅の量に応じて毎年少しずつ茅屋根を葺き替えて、集落内外の人が集うコミュニティの拠点として整備してきました。2015年に毎年続けてきた屋根の葺き替えが一周しました。今は目下、茅葺き民家が40軒ほどあった70年ほど前、暮らしに組み込まれていた、山裾の茅場をコミュニティ総出で守り、茅を刈り、刈った茅を里に運び、屋根を葺き替えるという“茅葺き屋根のある里の風景”を再生することを目標としています。そのために、集落内の茅場を再生しています。

活動内容と成果

茅場探検ワークショップの実施

かつて集落の40軒ほどの家がほとんど茅葺き民家だった頃は、集落背後の山では地元住民によって茅、薪、木材や食料などの資源調達が行なわれ、谷津の低地は水田として利用され、さらに子どもたちの遊び場としても活用されるなど多様な利用がされていました。しかし集落での暮らしの変化とともに山利用は減少し、現在では山を利用する人はほとんどいなくなりました。また、田は荒れ地に変わり山に続く道も手入れが行き届かずほぼ塞がってしまったため、地元住民でも山に立ち入る事自体が困難となっており、自分の持ち山の様子すら分からない状態となっていました。

そこで、かつて集落がほとんど茅葺き民家だった頃塩見集落にあった“茅葺き屋根のある里の風景”とはどのようなものだったのかを探るために、現在立ち入り困難となっている山に地元住民と学生が協力して入り、かつて利用されていた山奥の茅場を探すとともに、現在の山の状態を確認する「茅場探検ワークショップ」を企画しました。

茅場探検ワークショップ当日は地元住民4名と学生約20名が参加し、それぞれが手に草刈り機や鎌などの道具を持ち、地元の方の案内で山道を切り開き山奥まで歩き進めました。道は数年間手入れされていない箇所もあり、人の背丈以上の草木が生えている場所もありましたが、地元住民と学生が協力して道を切り開いたことにより、塩見集落の境界近くというかなり山奥まで到達する事ができました。また、山奥の斜面地にはかつて利用されていた4箇所の茅場を発見する事ができました。発見した茅場は利用されなくなって数十年経つためいずれも既に森になってしまっており、現在再生する事は困難だということが分かりましたが、この茅場探検ワークショップを実施したことによって以下の様な成果を上げることが出来ました。

ⅰ)茅葺き民家のある里の風景・営みの再認識

地元の方たちは当初荒れてしまっている山に入るのに難色を示しましたが、学生たちに後押しされて一旦山に入ると昔を思い出して一転前向きになり、道を切り開く作業でいっしょに汗を流しながら自分の山や茅場のこと、かつての茅刈りのようすや集落のようすなどを語ってくれました。家の中で行なうインタビューだけでは聞けなかった集落に昔あった循環についての貴重な情報をたくさん得ることができました。また、この活動がきっかけとなって地元住民有志で定期的に山奥まで行ける様に道を整備しようという活動が発足するなど、地元の方も里山の風景を再認識する機会となりました。

ⅱ)茅場再生に向けた意識の高まり

茅場探検がきっかけとなって学生と地元の方の間で塩見集落の茅場を再生したいという思いを再度共有することができ、地元の方から耕作放棄水田に最近になって茅が群生して生えてきたという茅場再生候補地を2箇所教えていただくことができました。さらに発見した茅場再生候補地をいっしょに視察に行くなど、集落内の茅場を再生するという目標に向けて大きく前進することができました。

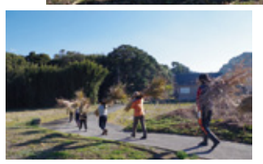
茅刈りワークショップの実施

塩見集落内での茅の収穫量を増やして、ゴンジロウの茅葺き屋根の材料となる茅を安定して手に入れるために茅場を整備する茅刈りワークショップを企画しました。

茅刈りは1月16日、17日の2日間で実施し、2日合わせて地元住民と学生計30名が参加しました。

16日は、これまでも5年間毎年刈り続けてきたゴンジロウのオーナーが所有している小さな茅場で茅刈りワークショップを行ないました。地元の方の指導のもと参加者は茅を刈り、使える部分と使えない部分に分別して、使えそうな茅を束ねました。集落内を一列になってゴンジロウにある蔵まで運びました。刈り終わった茅場は雑草などを燃やすことできれいに整備しました。この茅場では毎年継続的に茅刈りを行なってきた成果がようやく出始めました。今年度は収穫量よりも来年以降も良質の茅を収穫するための整備に重点を置き、収穫する茅を厳選したため収穫量は20束程度でしたが、毎年70束は安定して茅が収穫できる茅場となってきました。

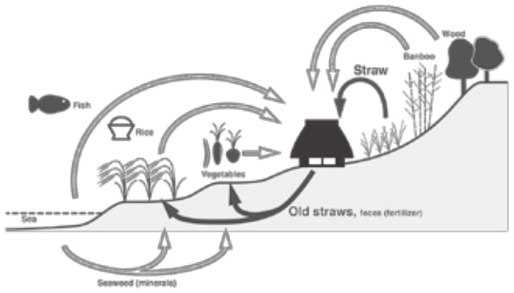
17日は、今年度初の試みとして、茅場探検をきっかけに発見した水田跡の茅場の整備にも取り組みました。この茅場はゴンジロウオーナーの茅場の1.5倍程度の広さがあり、水田として使われていた後10数年程放置されていたため、荒れ地となっていました。そのため、いばらや雑草もたくさん生えておりそれらと格闘しながらの整備となりました。今年収穫した茅は葺き替えに利用できるものではありませんでしたが、来年以降も根気強く毎年整備を続けていくことで今後茅場として利用できるようになることが見込まれます。



餅つき会の実施

今年度の活動の締めくくりとして、茅葺き民家ゴンジロウにて餅つき会を開催しました。餅つき会は2年ほど前から毎年春に行なっており、地元住民と毎年代替わりする学生が顔を合わせて交流する機会となっています。学生が地元の方にやり方を教えていただきながら一緒に餅をつき食べることでより両者の交流をより深めることができました。

また、今回の餅つき会はゴンジロウプロジェクトが総務省ふるさとづくり大賞の団体表彰を受賞した祝賀会と茅場探検や塩見集落での学生による調査結果の報告も同時に行ない、今後も活動を続けて行くにあたり集落内外の多くの人に改めてゴンジロウプロジェクトを知ってもらうきっかけとなりました。



Ecosystem generated by human activities

今後の予定

茅葺き民家が40軒ほどあった70年ほど前は、山裾の茅場をコミュニティで守り、コミュニティの共同作業によって葺き替えており、茅を刈り、茅を里に運び、屋根を葺き替えるという風景が、暮らしの中に組み込まれていました。しかし、生活がすっかり変わった現代、昔と同じコミュニティを再生するのは現実的ではありません。今回、学生、住民、茅葺きに関心のある人たちがいっしょに汗を流して茅場の再生に取り組んで、新たなコミュニティができつつあるのを実感しました。茅刈りから葺き替えまで、いろんな人がいっしょに作業を毎年繰り返すことによってゴンジロウは維持されていきます。みんなで作業して維持するプロセスがみんなの空間であるという帰属意識を高めます。こうしてゴンジロウを将来世代の活動の源泉となる空間に育てていきたいと思います。

塩見の茅場が再生されれば、ゴンジロウの屋根を維持していくのに十分な茅を塩見で確保できるようになります。そして、十年間程度刈り貯めた後には、たっぷりの茅で今より厚く葺ききれいに刈り込んで、旧家の風格にふさわしい屋根を取り戻したいと思っています。一度は失われかけた茅葺きのある暮らしのサイクルを、現代に適合したかたちで蘇らせたいと考えています。